



Data

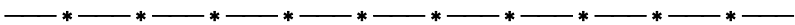
監督・脚本: カロリーヌ・リンク
原作: ジュディス・カー「ヒトラーにぬすまれたももいろうさぎ」(評論社刊)
出演: リーヴァ・クリマロフスキ / オリヴァー・マスッチ / カーラ・ジュリ / マリヌス・ホーマン / ウルスラ・ヴェルナー / ユストウス・フォン・ドホナーニ / アン・ベンネット / ベンヤミン・サドラ

👁️👁️ みどころ

ヒトラーはヨーロッパ中の名画を根こそぎ奪ったことで有名だが、9歳の女の子から、うさぎまで奪ったの? いやいや、それはない。すると、この邦題は一体ナニ?

ナチ党が「民意」を得て勢力を増す中、ユダヤ人のアンナー家はスイスへの亡命を決行! これが『アンネの日記』のアンネと本作のアンナの命運を二分したが、アンナは苦しい時代の中、いかなる想像力を手に? 本作は、「ナチスもの、ホロコーストもの」だが、悲しさよりも明るさが際立っている。それは一体ナゼ?

原作者であるジュディス・カーの「伝記モノ」にしなかった、ドイツ生まれの女流監督カロリーヌ・リンクが、アンナに託した見事な演出に拍手!



■□■知らなかったなあ、こんな原作! こんなユダヤ人作家! ■□■

私は2020年5月に、『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて』を出版したが、同書に収録した72本の「ヒトラーもの、ホロコーストもの」のほとんどは涙を誘う映画や涙なくして観られない映画ばかりだった。来年早々に観る予定の『この世界に残されて』(19年)も、多分同じだろう。しかし、1933年2月から始まる、9歳の少女アンナ(リーヴァ・クリマロフスキ)とその兄マックス(マリヌス・ホーマン)、そして父アルトゥア(オリヴァー・マスッチ)、母ドロテア(カーラ・ジュリ)というユダヤ人の4人家族を描く本作は、悲惨な時代と状況下で描かれる悲しい物語であるにもかかわらず、悲しい涙を誘うものではなく、むしろ明るく前向きなものになっている。それは一体ナゼ?

『ヒトラーに盗られたうさぎ』という邦題も奇妙だが、本作の原作になったのは、『ヒト

ラーにぬすまれたももいろうさぎ』(評論社刊・現在は絶版)で、これは“Warten bis der Frieden kommt”(1975)、そして“Eine Art Familientreffen”(1979)の2作を入れて3部作になるもの。この3部作は、1923年にドイツのベルリンで生まれ、1933年に家族と一緒にドイツを離れ、スイスとフランスを経由してイギリスへ亡命し、成長後、女流児童文学者として大成したジュディス・カーの代表的な古典らしい。知らなかったなあ、そんな原作!知らなかったなあ、そんなユダヤ人作家!また、私は『リンドグレン』(18年)、『シネマ46』329頁)を観るまでは、世界で4番目に多く翻訳されたデンマークの児童文学者アストリッド・リンドグレンのことを知らなかったが、それと同じように、本作を観てはじめてジュディス・カーのことを知ることに!

ちなみに、『ミケランジェロの暗号』(10年)、『シネマ27』123頁)、『黄金のアデーレ 名画の帰還』(15年)、『シネマ37』261頁)、『ミケランジェロ・プロジェクト』(13年)、『シネマ37』267頁)、『ヒトラーVS.ピカソ 奪われた名画のゆくえ』(18年)、『シネマ45』99頁)を観ればわかる通り、ヒトラーはヨーロッパ中の名画を根こそぎ奪い取ったことで有名だが、9歳の女の子から“うさぎ”まで奪ったの?いやいや、それはない。すると、このタイトルは一体ナニ?

■□■本作のアンナ vs 『アンネの日記』のアンネ! ■□■

本作を監督したカロリース・リンクは、『名もなきアフリカの地で』(01年)、『シネマ3』151頁)で注目された、ドイツ生まれの女性監督。脚本も共同で執筆した彼女は、原作者のジュディス・カーと話し合いを重ねる中で、「なんだってできるのよ。一緒にいればね」という、ジュディス・カーの人生のモットーを本作のテーマに据え、感動的であると同時に、楽しい映画にしたいと思ったそう。本作のアンナのモデルは、もちろんジュディス・カー自身だ。

私は寡聞にしてジュディス・カーのことを知らなかったが、『アンネの日記』の主人公である少女アンネは超有名。そして、アンネを描いた映画には、『アンネの追憶』(09年)、『シネマ29』145頁)や、『アンネ・フランク 真実の物語』(01年)等がある。本作のアンナと『アンネの日記』のアンネは同時期に生まれた、共に文才あふれる女の子だったが、屋根裏に隠れながらも結局ナチスに発見されて殺されたアンネに対して、アンナは一家そろって亡命したことによって、ナチスの迫害を逃れることができたから、その差は大きい。残念ながらジュディス・カーは本作完成直前の2019年5月に死亡したが、95歳の天寿を全うしている。

もし、アンネが生きていれば素晴らしい作家になっていたことは間違いないはずだから、そんな視点からも、本作のアンナ vs 『アンネの日記』のアンネの対比を、しっかりしておきたい。

■□■引越しの要否は国政選挙の結果で! その理由は? ■□■

日本の国政選挙では地縁と血縁が大切だが、例外的に“落下傘候補”もある。その“落

下傘候補”は、いったん住民票を現住所から選挙区に移すが、落選すればまた元の住所に戻ることになる。このように、“落下傘候補”の家族は国政選挙のために引っ越しを余儀なくされるが、それはあくまで“落下傘候補”の都合によるものだ。

しかし、本作導入部では、家族同然のお手伝いのハインピー（ウルスラ・ヴェルナー）とともにベルリンに住んでいるアンナー家が、1933年3月に実施される総選挙でヒトラー率いるナチス党が勝てば、家族全員がスイスに移住しなければならないというストーリーが描かれるので、それに注目！そもそもこのように、国政選挙の結果如何によって、アンナー家が引越ししなければならないのは一体なぜ？

折りしも日本では、今年9月、7年8か月続いた安倍晋三長期政権に代わって、菅新政権が誕生したが、衆議院議員の任期は2021年9月までだから、それまでのどこかで総選挙が実施されるのは確実。同選挙での政権交代の可能性は低いが、その結果如何によって引っ越しを余儀なくされる家族はいないはずだ。したがって、本作導入部ではまず、国政選挙の結果如何で、アンナー家が引越しを余儀なくされることの意味をしっかりと確認しておく必要がある。

■□■スイスに馴れたのに今度はパリへ？その中での成長は？■□■

『アンネの日記』の主人公は15歳の女の子アンネだが、『ヒトラーに盗られたうさぎ』と題された本作の主人公は、タイトルとされているうさぎのぬいぐるみの所有者である9歳の少女アンナ。そのモデルである実在の人物ジュディス・カーはロンドンで劇作家として大成し、兄のマイケル・カーも、ロンドンの高等法院における最初の外国生まれの裁判官として活躍したが、それはひとえに両親が子供たちに素晴らしい教育を授けたからだ。それについては、パンフレットにあるEssay、①伊藤さと（映画パーソナリティ・心理カウンセラー）の「授業では教えてもらえない才能を伸ばす自己受容学」と②角野栄子（児童文学作家）の「苦しい時代に想像力という贈り物を手にした」、が興味深い分析をしているので、それに注目！

それらを読むまでもなく、本作冒頭に見る仮装大会で、怪傑ゾロに扮した兄マックスと、“物乞い女”に仮装したアンナを対比すれば、両者の感性の違いがよくわかる。また、幼い頃に絵が大好きな女の子は多いが、事故の絵しか思いつかないため、船が沈没する絵ばかり描いているアンナのような女の子は珍しい。そんな時、普通の親や先生は、「こんな悲しい絵を描いてはダメ。もっと楽しい絵をかきなさい。」と言うものだが、アンナの父親のアルトゥアは、「好きな絵を描けばいい。他人の意見は気にするな」と対処していたからエライ。

また、ベルリンからスイスに引っ越すについて、「持っていくものはおもちゃ一つと本二冊だけ」と母親から厳命されたアンナが新しい犬のぬいぐるみを選んだため、結局、うさぎのぬいぐるみがベルリンに取り残されることになったわけだが、「さよなら ピアノ」「さよなら テーブル」「さよなら 台所」「さよなら 古い家」と、一つ一つに別れを告げていく感性は素晴らしい。こんなアンナだから、同じドイツ語でもスイスの方言で全く理解

できない言葉をすぐに吸収できたのは当然だ。また、ドイツ式とスイス式の教育や習慣に戸惑ったものの、新しい環境下で喧嘩しながらもすぐに親友を見つけ、素晴らしい成長をしていったのも当然だ。これなら、ベルリンからスイスへ引っ越しても大丈夫。そう思っていたのに、今度は父親から「パリへ引っ越すかも・・・」と言われたからビックリ。やっと引っ越し先のスイスに馴染めたのに、今度はパリへ？それは一体ナゼ？

■ユダヤ人は“流浪の民”！それは「あの名作」でも！■

森光子の金字塔が『放浪記』の林芙美子役なら、森繁久彌のそれは、『屋根の上のバイオリン弾き』のテヴィエ役。1964年にブロードウェイで初演されたミュージカル『屋根の上のバイオリン弾き』は、本来日本人が演じて全然似合わない(?)ミュージカルだが、結果的に同作のテヴィエ役は森繁久彌にピッタリのはまり役になった。同作を観れば、ユダヤ人は“流浪の民”というイメージが強いが、それは本作を観ても同じだ。1933年3月のドイツ共和国(通称ワイマール共和国)の国会議員選挙で、ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党(ナチ党)が288議席(得票率43.9%)を獲得したことによって、ユダヤ人のアンナー一家がスイスへの亡命を余儀なくされたのは、ある意味当然。辛口演劇評論家のユダヤ人であるアルトゥアが、スイスでも同じような執筆活動で生計を立てることができればいいのだが、それはなかなか難しいらしい。しかし、フランスの新聞社なら・・・。

ベルリンからスイスへの引っ越しについては、父親のアルトゥアとお手伝いのハインピーを残して、母親と子供たち3人が“先遣隊”になったが、スイスからパリへの引っ越しについての“先遣隊”は母親のドロテアだけ。良いアパートを見つけたら残りの家族も全員引っ越ししたが、そもそもフランス語が全く分からないアンナー一家がパリへ引っ越すについては、何の不安もないの？その点の楽観主義(?)には驚くばかりだが、それはもともと“流浪の民”であるユダヤ人の本性？そんなことはないはずだが、期待したほどではなかったフランスのボロアパートで、“流浪の民”アンナー一家はどうやって暮らしていくの？

■パリでの生活は困窮！でも、この前向きさはどこから？■

アルトゥアがスイスからフランスへの引っ越しを決めた最大の理由は、フランスならたくさん新聞社があるので自分の演劇評論の掲載先もたくさんある、と考えたからだった。しかし、現実には、ベルリンでは一流の辛口評論家だったアルトゥアも、フランスでは安い原稿料の小さいコラムを1つももらっただけだったから、一家の貧困は強まっていくばかり。そんな中でも妻のドロテアは、パリで再会した、アルトゥアがボロクソに貶していた演出家夫婦の家に子供たちを連れて出かけていき、ご馳走になったりするたくましさ(?)を見せるので、それにも注目！

パリのアパートの、がめつい大家さんは毎週の家賃の催促に懸命で、貧乏なユダヤ人をこき下ろしていたが、子供たちの教育に熱心なケンパー夫婦の姿や仕事にありつけずに困惑するアルトゥアを尻目にたくましく生きていくドロテアの姿を見るにつけ、“流浪の民”

であるユダヤ人の知恵とたくまじさに納得！

なるほど、これならアンナー家が新たなフランス語にすぐに馴れたのもよくわかる。それにしても、パリに引っ越して1年余りのアンナがフランス語の作文コンクールで優勝したことにビックリなら、アルトゥアが書いていた、ナポレオンを主人公にした脚本がイギリスで売れたことにもビックリ！アンナー家のこの前向きさは一体どこから来ているのだろうか？本作後半では、それをしっかり見定めたい。

■□■ナニ！今度はイギリスへ！一家の新たな絆と決意は？■□■

ナポレオンを主人公にした脚本がイギリスで売れたとの報告を受けたアルトゥアは、直ちに、不遇だったパリから新天地と思われるイギリスのロンドンへの引っ越しを決意。ここでも、“流浪の民”ユダヤ人の面目躍如だが、私たち日本人の目には、やっと少し馴れたフランスを離れて新たにロンドンへ移住し、英語を学ばなければならない一家は大変だ。

しかして、本作ラストはパリからロンドンへ渡る船の上の家族の姿になるが、その時点ではアンナもマックスも大きく成長しており、イギリスでの新たな生活への不安は全くないようだからエライ。もっとも、その時点では、既にお手伝いのハインピーとの再会は難しくなっていたし、ユリウスおじさん死亡の悲報を受け取った後だったから、ますます孤立状態は厳しくなったケンパー夫妻にとってのロンドンの生活は如何に？そしてまた、アンナとマックスにとってのロンドンは如何に？

前述した伊藤さとのり Essay は、「結果、どの国に行ってもお前なら言葉をすぐに覚えられると父親に言われたアンナの自己肯定感は、更なる才能を開花させるのだ」と述べ、「世界中の子供たちに希望を与えた絵本作家ジュディス・カーを育てた両親の子育て論は、『自己受容』と『勇気づけ』と結論付けている。まさにその通りだ。また、本作のラストには、ハリウッド大作のような華やかさもドラマティック性もないが、ケンパー夫妻の子育て論のすばらしさをくっきりと浮き彫りにしている。前述した角野栄子の Essay のタイトル通り、アンナは、この父親アルトゥアとこの母親ドロテアから、「苦しい時代に想像力という贈り物を手にした」のだから、そんな両親の功績に拍手！

本作を鑑賞するについては、そんな大切な教訓を静かにそしてじっくりと確認したい。

2020（令和2）年12月16日記